

# 幼児の音楽発達とリトミックに関する一考察

## ― 楽曲分析と事例検討をととして ―

今 井 暁 式・吉 村 夕 里・堀 内 詩 子

### 1. はじめに

平成 21 年度より試行された幼稚園音楽教育に関する指導要領には、幼児の表現活動・音楽体験について、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにすること」とある（文部科学省, 2008）。保育所保育指針のなかにも、「保育士等と一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶこと」の定義があり、保育士自身が子どもの環境として「音」に敏感であることが求められている（2008, 厚生労働省）。

幼児に求められている音楽体験は「技能の習得」ではなく、人間とのふれあいのなかの媒体である音楽であり、ファンタジーやイメージを広げ、共に遊ぶ役割が期待されているが、以上の体験は発達心理学との関連においてどのように捉えられているのであろうか。

本論文では幼児と音楽的発達についての先行研究を整理するとともに、現在の幼児と児童のうたの傾向を分析する。また、リトミック的要素を取り入れた楽曲分析やピアノ教室での取り組みを紹介することを通して、幼児への音楽指導の在り方についての考察を試みる。なお、リトミックとは、スイスの作曲家 Emile Jaques-Dalcroze (1865-1950) によって考案された音楽教育法で、音楽教育にリズム運動を取り入れ、音楽に反応して動くことで感じる心や想像力を

養い、身体の協調・調和を作り出すことを目的としている。

### 2. 幼児の音楽的発達

#### 2-1. 音楽的発達の過程

音楽は聴覚的芸術と言われるが、幼児の音楽的発達において音の知覚や歌うこと、聴覚の発達や声帯の発達の過程などそれぞれの発達過程がある。

音の知覚については、胎児も音に反応して胎動する、新生児も音の判別が可能であるとされており、生後 4 カ月ごろから音へのオリエンテーションが出来始め、3～4 歳では音刺激に反応して遊ぶなど、聴覚と運動能力の律動が可能となる。5 歳からはほぼ成人同様の聴力が獲得されて（常石, 2008）、音楽表現への理解が芽生える。McDonald ら（1999）は音量と音色に対する反応性と識別力の発達を分析して、幼児はメロディーとリズム理解をした後、和音の理解への発達を遂げるとしている。また「高い」「低い」などのあいまいな指示表現に対しても 5 歳になれば幼児は十分な理解を示すようになる。

歌うこと発達についての McDonald ら（1999）の研究では、19 カ月～24 ヶ月で幼児は短い自発的なうたを口ずさむようになり、2 歳からは知っているメロディーの全体ないしは部分を歌うようになる。2 歳半～3 歳にはうたの模倣が始まり、4 歳からはうた全体を一続きに歌うようになり、5 歳頃には音の知覚を言語表現に変

換できるとともに、音程が安定していく。そして、音の知覚とうたの以上の発達を経て、リズム、歌詞、メロディーの輪郭が整ってくる。この過程は、喃語に近かった幼児のうたが、模倣により外の音楽と繋がり、養育者や保育者や子ども同士の関係のなかで拡がっていく社会的な過程でもある。

声域については、声帯や呼吸器の緊張や弛緩に関わる筋肉運動のため、身体発達や心理的な影響を受けやすいと言われている。声域に対する研究は、発声音域の研究がほとんどであり、そのいずれもが類似した調査結果を報告している（加藤, 1987）。一方、志民・今川（2003）は、うたを歌う時と日常の遊びのなかでの幼児の限界音域を比較するための調査を行い、うたを歌うときの限界音域と、日常の遊びで高揚したときの限界音域の周波数に明らかな差があることを見出している。以上の結果は、幼児にとって、音程をとることをはじめ、声帯をコントロールしながら外界の刺激に合わせていく難しさを示唆しているとともに、音楽を考える際、音楽と身体や、身体を通した他者との関連やうたを歌う状況が無視できないということを示唆しているのではないだろうか。

## 2-2. 発達心理学から見た音楽的発達

音楽的な発達には聴覚や声帯などの発達だけではなく、姿勢・情動的な機能や、表象機能などの発達も関与している。Henri Wallon (1879-1962) は、類的な概念から子どもの発達を姿勢・情動の発達過程として捉えている。Wallon は姿勢運動発達における自己受容感覚の二重性や、模倣や遊びの二重性を重視して、発達は周囲と未分化な状況から二重化を経て、自己意識や表象が立ち現われて、自己が外界から分化していく過程とみなしている。

以上の観点を音楽の発達に当てはめると、た

とえば、母親が乳児をあやしながら子守りうたを歌うという状況への情動反応は、乳児が自分の情動を通して外部を把握すると同時に、自分の状況を外部に伝えるという二重の意味があり、母親との間の相互理解システムの形成を促進する。また、歩行を獲得する時期に現れる「交替やりとり遊び」にも、交互の発声が介在するなど、母子の姿勢運動活動には必ず音や発声や発話が介在する。さらに、母子でうたを歌う、音楽を聞くという活動にも発声や発話や身ぶりの「模倣行為」という要素が必ず介在している。このように、幼児をめぐる音楽表現活動は、発声を含んだ姿勢活動や情動と切り離すことはできない。

したがって、幼児をめぐる音楽表現活動は、認知機能や感覚機能の発達という側面から捉えるだけではなく、表象や自己意識の形成という側面から捉えることが必要である。また、音楽表現は模倣行為を通して洗練されていく創造活動という意味合いも含んでおり、「歌いかける自分」と「歌いかけられる自分」という二重性が生み出す内的手本とのずれを通して、自己と他者の表象や自己意識を育む過程となる。そして、うたを歌えるようになった幼児は音楽活動がもつ表象的意味合いのやりとりを通して、その人格を発展させていくのである。

## 2-3. 幼児の音楽表現と表象

音楽療法と Jung (Carl Gustav Jung 1875-1961) との関係について、Leslie Bunt は 1956 年に音楽療法師 Tilly が Jung の前で演奏したエピソードを紹介している。それによると Jung は当初、「音楽はきわめて深い元型的素材を扱っているのに、演奏家はそのことに気づいていない」と言っていたが、Tilly の演奏を聞き、音楽的選択にユング心理学のキ概念が影響を及ぼしている事実気づいて深い感銘を受けて

いたという (Bunt,1994)。

一方、Jensen (1983) によると、Jung は Tilly に以下のように語っている。

「この方法によって、完全に新しい研究の道が開かれるぞ。夢想だにしなかったことだが。今日、あなたに見せてもらったものは、といっても、あなたの話したことではなくてわたしが実際に感じ、経験したものによって感じるのだが、これから先は音楽が日常の分析療法で不可欠の務めを果たすべきだと思う。音楽を使えば深層の元型的素材に手が届くのだ。患者を相手にして分析をしてその場所に届くことはめったにないのだが。これこそ特筆に値するものだ」

以上は音楽表現にある表象的な意味合いを考えるうえで興味深いエピソードである。では、幼児はどのような原型イメージを体験したり、表現しているのだろうか。以下に幼児に馴染みの深い素材に込められた原型イメージやファンタジーについて検討していく。

#### 「おまえうまそうだな」

宮西達也の絵本アニメ「おまえうまそうだな」(宮西, 2003) は生まれたばかりの赤ちゃんを見て、恐竜は「おまえうまそうだな」と言うが、赤ちゃんは自分の名前を呼ばれたと勘違いし、自分の名前を知っているのはお父さんの違いがないと思うところから物語がはじめる。たった一人で卵から孵った恐竜の赤ちゃんは元型的な「みなし子・捨て子イメージ」であり、守られた母親の環境、すなわち無意識の世界から飛び出し、意識を成長させるための生活を始める英雄物語をほうふつとされる。男児が自身に偉大なものの芽えを意識するときは父親

を意識する時でもある。

筆者の知っている3歳の男児は「僕、お父さんになる」と話したちょうどその時から恐竜が好きになり、図鑑を買い、恐竜の物まねをし始めたという。そして幼児向けテレビ番組で「おまえうまそうだな」のアニメをみつつ、赤ちゃん恐竜が父親的恐竜と一緒に「ギャオー」と叫ぶのにあわせて、ギャオーと赤ちゃんになりきって叫ぶのである。その姿は、偉大な存在を自分自身のなかに感じた時の英雄元型になりきっている。

Jung の音楽に対する知見の流れをうけ、五大音楽療法の一つである分析的音楽療法の創始者である Priestley は、ウイニコット派の精神分析とユング派のスーパービジョンを受け、それからの着想を得ているが故に、その音楽療法に元型的イメージ体験を重要視して、次のように述べている (Priestley, 2003)。

クライアントのシンボルは、クライアント本人も気づいていないがゆえに言葉にできないメッセージを、セラピストに伝える役割をするだろう。しかし、それらが一旦表現されたり、体験されたりすれば、シンボルはクライアントに影響を与える。それらには、面白みのない内面生活に、豊かさや新たな次元を加えたように感じられる確信に満ちた独特の現実性があるのである。

うたやアニメや昔話や童話という素材を通して、幼児は養育者や保育者に対して言語では表現できない表象的意味合いを表現し、内的世界を豊かに成長させていく。Priestley が述べるように、幼児が元型イメージを表現することがその成長に大きな意味をもたらすのである。

以上、音楽表現活動がもつ意味合いを表象や自己意識といった側面から考察してきた。以下の項より幼児の生活のなかにおける音楽のあり方を検証したい。

### 3. 幼児のうたについて

#### 3-1. 幼児のうたと児童のうた

現在、幼児に歌い継がれている歌の特徴を分析するために、現在発刊中の指導者のための本を2冊選び（長谷川, 2010：小林, 1975）、重複している曲やアニメのうたを除いた223曲の題名についてのKJ法に基づいて分類を行った。基準となる本の1冊は最も新しく刊行された本であり、1冊は30年以上刊行され続けている本を選択した。指導者の為の本はどの項目にも分類されない「その他」を5パーセント以内として、分類項目を設定した結果、表1のとおりとなった。同様に、小学生の学習教材として用いられているうたの本2冊を無作為に選択し（教芸 音楽研究グループ編集, 2003：教芸 みんなでうたおう編集委員会, 2003）、重複した曲を除いた204曲についてKJ法に基づいて分類を行った。幼児の際に用いた分類を主軸にするが、該当するものがない場合は削除を行った。分類されない「その他」は5パーセント以内とした。その結果は表2のとおりとなった。さらに幼児のうたと児童のうたを合わせて、上記の項目で分類した結果を表3に示す。

表1 幼児のうた

- |     |                                     |
|-----|-------------------------------------|
| 1)  | 生活に関するうた<br>「おかたづけ」「はをみがきましょう」等     |
| 2)  | 自然に関するうた<br>「ゆうやけこやけ」「おほしさま」等       |
| 3)  | 音楽に関するうた<br>「おおきなたいこ」「うたえバンバン」等     |
| 4)  | 空想のお話のうた<br>「ちびっ子カウボーイ」「おばけなんてないさ」等 |
| 5)  | 行事に関わるうた<br>「ありがとうさようなら」「えんそくのうた」等  |
| 6)  | 手遊びうた<br>「いとまき」「げんこつやまのたぬきさん」等      |
| 7)  | 人とのかわりに関するうた<br>「おかあさん」「さっちゃん」等     |
| 8)  | 動物に関わるうた<br>「あめふりくまのこ」「かえるのうた」等     |
| 9)  | 季節に関するうた<br>「こいのぼり」「チューリップ」等        |
| 10) | 身体に関するうた<br>「おはなしゆびさん」「あがりめさがりめ」等   |
| 11) | のりものに関するうた<br>「はしれちょうとつきゅう」「バスごっこ」等 |
| 12) | その他・・・上記に分類されないもの                   |

表2 児童のうた

- |     |  |
|-----|--|
| 1)  | 生活に関するうた<br>「ハローハロー」「今日の日はさようなら」等                      |
| 2)  | 自然に関するうた<br>「あの青い空のように」「エーデルワイス」等                      |
| 3)  | 音楽に関するうた<br>「歌はともだち」「ドレミのうた」等                          |
| 4)  | 空想のお話に関するうた<br>「パフ」「宇宙人に会えたら」等                         |
| 5)  | 行事に関するうた<br>「ドッキドキドン一年生」「巣立ちの歌」等                       |
| 6)  | 手遊びに関するうた<br>「head, shoulders, knees and toes」「たのしいね」等 |
| 7)  | 人との関わりに関するうた<br>「友達はいいいもんだ」「友達になった日」等                  |
| 8)  | 動物に関わるうた<br>「いるかはどんぶらこ」「もりのくまさん」等                      |
| 9)  | 季節に関するうた<br>「もみじ」「夏の思い出」等                              |
| 10) | 未来に関するうた<br>「未知という名の船にのり」「翼を下さい」等                      |
| 11) | その他 上記に分類されない曲   |

表3 幼児と児童の音楽教材の分類

	幼児		児童	
	曲数	パーセント	曲数	パーセント
動物に関わるうた	51	23%	8	4%
生活に関するうた	46	21%	7	3%
季節に関するうた	31	14%	47	23%
手遊びうた	19	9%	8	4%
空想のお話のうた	18	8%	18	9%
自然に関するうた	14	6%	37	18%
身体に関するうた	11	5%	0	0%
人とのかわりに関するうた	10	4%	34	17%
行事に関わるうた	8	4%	16	8%
のりものに関するうた	8	4%	0	0%
音楽に関するうた	4	2%	10	5%
その他	3	1%	11	5%
未来に関するうた(児童のみ)	0	0%	8	4%
合計	223	100%	204	100%

表3のとおり「生活に関するうた」や「動物に関わるうた」、「手遊びのうた」は幼児の方が児童よりも割合が大きく、「身体に関するうた」、「のりものに関するうた」の児童の該当がなかった。「人との関わり(友達)に関するうた」や「未来や夢に関するうた」は児童の曲数の方が多い結果となった。幼児のうたの特徴は生活に密接したものや、動物などのイメージを捉えるものが多いことが明らかとなった。同じイメージに関するもので、「空想のお話」という分類があるが、これは児童の方が割合として多かった。これは話が発展される曲が多く、歌詞やフレーズが長くなる傾向のため幼児のうたで含まれる割合が小さいと考える。

## 4. リトミックの楽曲分析と事例検討

### 4-1 リトミックの目的

Dalcrozeは「リトミックに関するすべての練習の目的は集中力を高めることである」と明言している。彼は、感動する心は集中力や注意

力に依存しているという理論に準拠し、音の変化、リズムの変化に遊びを通して気を配り、リズムの変化に対応することやイメージを身体で表すなど、得た情報を別の情報処理に変換することで表現を養うことを重視した。岩崎(1993)はリトミックで取り扱う項目を「即時反応」「拍と数」「動きの基礎練習」「声のコントロール」「音」「拍子」「遊び歌」「基礎リズム」「指揮」「リズムパターン」「リズムカノン」「オスティナートリズム」「演奏」であると紹介している。これらの組み合わせ体験を通して幼児は音楽を演奏する土台として楽典や基礎知識を学び表現活動をしていくのである。

実際のリトミックのなかで最も頻繁に用いられるのが即時反応である。本研究では、即時反応を「音楽の変化を聞き取り、あらかじめ決められた動作で行動表現すること」と定義して論を進めていく。たとえば音楽の演奏者が「音が止まったら、お散歩もストップさせましょう」とルールを決めておき、幼児は音楽が鳴っているときは自由に動き、音楽が止むと動作を静止させるという一連の活動を行う。以上の活動には、音への認知と体のコントロールを必要としており、幼児は音や外部の状況に気を配り続けることによって、集中力が養われ感動を生むのだとDalcrozeは後に述べている。

即時反応を用いる音楽にはどのような特徴があるのだろうか。以下に分析していく。

### 4-2 即時反応を期待する楽曲の特徴

#### 1) 合図を利用した即時反応

即時反応を体験するにあたって、楽曲をどのように利用したらよいだろうか。最もよく扱われるのが、合図を利用した即時反応である。資料1のように8分音符をふんだんにつかい、乗り物などのイメージで動きの速い曲であれば、幼児を走らせスピード感を楽しみながらどんな



場所でも合図と共に曲を途中で止めるという体験も楽しいであろう。たとえば、ブレーキを踏むような音を出し、その音を合図として幼児自身の走りにもブレーキをかける。幼児は乗り物と自分との一体化を体験することによって、自分の身体がいかに速い乗り物になったように感じる。

自分の身体をコントロールできるという自信は自己効力感に繋がる可能性を柴田（2005）、桜井・杉原（1985）は研究のなかで指摘している。自分を強くて速い車に例え、ブレーキと共にストップさせることが出来る満足感を体験することは幼児にとって、重要な体験である。

## 2) 半終止を利用した即時反応

即時反応には音を途切れさすことで幼児に注意を向けさせる方法をよく用いる。音を止めるタイミングには完全に終止してしまったところ

で音を止めてしまう方法と曲の途中で止める方法があり、幼児の体験は違うものになる。曲の途中で止めるときは半終止を利用する方法がある。一例を紹介したい。

資料2はキラキラ星を即時反応するために編曲された教材である。楽譜は4小節目までは通常のキラキラ星だが、4小節目の第2音目が、特徴的である。幼児はこの音楽に沿って手をたたいたり、動いたりしている。この2音目に演奏者は「はい」と指示を出し、その後は（間）となつて、幼児は動きを止める。この2音目で止まる事にこの半終止の意味がある。4小節目の1音目の $g'$ で止まる指示を出すと、フレーズが $I \rightarrow IV \rightarrow I$ と和音が進行しているため、半終止となり心的に安定した状態での緩んだ休みとなってしまう。しかし2音目の $g'$ が加わることで、この2音目は半終止が終了した後に $V$ の和音へと続くフレーズの倚音となり、幼児は

資料1 速いパッセージと合図



出典：板野・岩瀬・石丸・長尾（1982）より

資料2



出典：板野・神原・野上（1987）より

経験的に次のフレーズを待ち望むこととなる。ちょうど、うたを歌う人が息つぎをし、フレーズを歌い初めようとしたときに止められたような経験で、2音目のgで止められることは、不安定感が残る和音進行であり、同時に止まっている幼児は耳を澄まし、緊張を維持し続けることになる。

### 3) 曲調の違いを利用した即時反応

前述した半終止を用いた即時反応は、音が聞こえるか否かという判断で、幼児は自分の行動を選択することになる。曲のなかで曲調が変化することは多分にあり、その曲調の変化に気が付き、別の行動へと変化させるのも即時反応のひとつである。

資料3の「あくしゅでこんにちは」(作詞：まどみちお 作曲：渡辺茂)は、曲の中で曲想が変化する楽曲のひとつである。この曲の構造は最初の4小節は8分音符でメロディーを構成し、フレーズは1小節づつ区切ることが出来る構造になっている。しかし5小節目から8小節目の「あくしゅでこんにちは」の場面では、フレーズが繋がっていて、一拍づつでは区切れずに、少なくとも1小節はひとつのフレーズで捉えるように構成されている。これまでは「てくてく」と4分の2拍子で拍をとっていたのが、あたかも2分の1拍子になったかのような錯覚を与える曲の作り方である。時間の流れが遅くなったような印象を受けるのではないだろうか。

資料3 あくしゅでこんにちは

**あくしゅで こんにちは** まどみちお 作詞  
渡辺 茂 作曲

出典：板野・神原・野上 (1987) より

ゆったりした2段目は「あくしゅでこんにちは」と友達とあくしゅで挨拶をするところである。これまで「てくてくてくてく」と速いリズムにのって息を細かく切りながら口の運動をしたあとに「あくしゅ」の「あ」が母音で伸ばしやすい発声であることから、思いっきりゆったり息が吐ける体験と友達と出会った喜びが重なり、音楽と言葉のもつイメージと幼児自身が体感(息を吐く喜びや開放感や、友達とあくしゅをする喜び)が重なることが出来る。またこれまではすべて隣り合う2度進行を保っていたが「こんにちは」の最後の音はこの曲で始めて4度上の音に上行している。このことも2段目が開放的な発声になる要素である。幼児は演奏者の変化に対応するよりも、曲のイメージの変化、友達との触れ合いに即時対応することが求められるが、この体験は音楽のつくりからも、また友達との出会いからも人に対する安心感を音楽を通して体験出来るのではないかと考える。

以下には筆者が実際に行った幼児への音楽教育から具体的な事例とその特徴を記述していく。

#### 4-3. ピアノ教室での取り組みから

##### 1) ケース1: Aちゃん

夢見がちでファンタジーが大好きだった6歳の女兒。筆者の元に個人レッスンに通う前はグルプレッスンに通っていた。大きなピアノ(筆者のグランドピアノ)を見て、怪獣の楽器みたいと言ったり、部屋の銀色の電気スタンドを見て、「UFOの電気」というように、動物や空想のうたに例えることがよくあった。彼女自身あまり器用ではなく、ピアノの継続年数に比べて、楽曲は弾きこなせないことが多い。家であまり練習はせず、母親によくしかられていたようだ。母親に怒られてようやく練習をするということが度々あり、母親が「先生、この子は本当に練

習をしなくて」と本人の前で愚痴を言うことがあった。早いペースを好まない代わりに、同じ曲を何度弾いても飽きない特性のある子だった。

音楽には興味はあるのだが、ピアノを弾きたいという意欲があまり感じられなかった為にレッスンの半分をイメージ遊びやリズム遊びなどのリトミックの要素を取り入れているようになった。

##### リズム)

リズムカードで動物のリズムの鳴きまねをしながら、リズム遊びを行う。リズムはたとえば2分音符を「モー」や「え〜ん」「にゃーあ」8分音符を「ちゅんちゅん」「わんわん」など、当日なりきる動物と一緒に選ぶ。なりきる動物と一緒に確認し、交互に鳴いたり、一緒に鳴いたりしてリズムを合わせ、2拍子でのリズム遊び、3拍子でのリズム遊びをとおして、拍の感覚を身につけた。

##### イメージあそび)

おばけが出る音を探してみようとか、風の吹く感じを探してみたり、サウンドマップを用いて、音を色にしてみたりしたり、楽譜を離れた音遊びを行った。強弱の違いに注目するために大きい音は怪獣や勢いのある動物が多かったのだが、小さい音は様々なイメージが出てきた。

##### 絵本をつかって)

リズム遊びやイメージ遊びを経て、「この絵本が好きだから、先生と音楽をつくりたい」とAちゃん自身が絵本を家から持って来てくれる。

Aちゃんの提案でその絵本をつかって、1ページ毎にAちゃんと筆者で、音楽をいれていくところを決めて、そのイメージでピアノを鳴ら



していく取り組みを行った。

筆者はこれまで、Aちゃんはあまり器用ではなく音楽は好きだけでも音楽的素養は少ないなど失礼ながら思っていた。しかし、絵本を持って来てからのAちゃんの様子に変化があった。Aちゃんはこの絵本の音楽付けに夢中になっていく。「もっとしたい、もっとしたい」とレッスンのほとんどを費やすこともあった。弾けながらも、自分の情感を指先に込めるAちゃん。言葉にならない思いを抱えて表現しようとしている姿を筆者自身が初めて見る機会となった。

このケースでは拍の把握や楽典の関わることなどは、リトミックの手法を応用している。またイメージ遊びや絵本の音楽作りは正解を求めない点では、どんなイメージかを「高い音がいいかな。低い音がいいかな」と話し合い、音域の違いや強弱にも言及した表現を主体的に取り組んでいた。音の高低や音の大きさなどの音楽的な土台をつくるというリトミックの理念から考えると、走り回るスペースがないピアノ教室で行えるリトミックの形ではないかと考える。

## 2) ケース2：Bちゃん

5歳の女兒。自分から「ピアノが習いたい」と母親を説得して習いに来た。のみこみが早く、いつも宿題に出されたこと以上の曲を仕上げてくる。耳から音をとることが出来、聞いたらなんとなくピアノ上で再現することが出来る能力があった。楽譜に書かれていることが弾けて、合格をもらえるのがうれしいようだ。

彼女はイメージで遊ぶよりも、スピードが速い事に興味を持つ。速いパッセージを弾けることに達成感を覚えているため、2分音符や全音符が待てずに、次の小節に飛び込んでしまい、ゆっくりした曲や短調の曲があまり得意ではな

かった。

## リズム)

リズムカードを使って、全音符を頂点としたピラミッドを作り、リズムカルタをしてソルフェージュを行う。また、身体を使って全音符や二分音符を体感する運動をする。全音符はため息、二分音符は短いため息の音符、四分音符は行進とした。そのリズムを組み合わせて、身体を使って身体表現を取り入れる。筆者の弾く即興音楽にあわせて、「行進」と「ため息」に即時反応する。このように音楽にあわせて立ち止まり、4拍、もしくは2拍待つことを身体で体験した。その後、全音符は深呼吸の音符と変え、実際のピアノの練習にも取り入れていった。

## イメージ)

イメージ遊びよりも、ピアノが弾きたいというので、イメージ遊びは練習した曲のなかでおこなった。左手の伴奏を「水がサラサラ流れるように」スタカートが出てきてあまり跳ねていないときは「指がボールになったよ」と伝え、無理なく指を跳ねさせることが出来ていた。

Bちゃんは技術的にもよく指が動く子だったので、曲を正確に演奏し、進度も速かった。イメージを用いる必要はなかったのかもしれないが、Bちゃんのように速く進みすぎることに、音楽的と言えるかどうかという点で筆者自身が抵抗を感じていた。音をまるで絵画のように見立てるのは印象派の作曲家から派生した音楽的な表現ではあるが、そのことを美しいと感じるかどうかというのは、体験に由来しているのではないかという仮説による。また指導者の側として、イメージを用いると支持的にならないという利点がある。全音符を「4つ伸ばしてね」というより、体験する事により自発的に「ここ

は4つ伸びている音を鳴らそう」と取り組む方がいいてやってやったことだが、一方でイメージを教師が先行させてしまうことの恐れも同時に考えうる。ひとつひとつのイメージについて、幼児の自発的な表現を取り入れる方法を今後も見つけていく必要が考えられる。

#### 4-4. 考察

本研究は、イメージを用いた音楽的な体験の意義を捉え、保育園や幼稚園で展開されている音楽活動が幼児の成長にどのように関わっているのか、またリトミックが幼児の自由な表現にどのように帰依しているのかを明らかにし、音楽指導のあり方を探る事を目的としていた。以上を踏まえて考察したい。

##### 1) 成長することと音楽との関わり

音楽的発達には、音の知覚とうたの発達、対人関係や、声域などの身体発達が関わっており、音楽表現活動は、認知機能や感覚機能の発達という側面から捉えるだけではなく、表象や自己意識の形成という側面から捉えることが必要である。また、音楽表現は模倣行為を通して洗練されていく創造活動という意味合いも含んでおり、幼児は音楽活動がもつ表象的意味合いのやりとりを通して、自己と他者の表象や自己意識を育み、人格を発展させていく。

音楽を介して表現されることも発達に重要な意味を持つ。音楽療法士でユング派の分析も受けた Priestley (Mary Priestley) は、「音楽療法としてイメージを扱うときに、クライアントのシンボルは本人が気がついていないが故に言葉にできないメッセージをセラピストに伝えているのであり、それが一旦表現されたり、体験されたりすれば、シンボルはクライアントに影響を与える」(Priestley, 1994) と述べている。

幼児の音楽体験は音楽療法ではないが「表

現活動」そのものには同様の意義があると思われる。幼児を取り巻く世界では、母親を始めとする大人の世界との間に矛盾が生じることもある。その体験を表現するうえで、音楽と、音楽に絡んだ物語は、相反する感情についてのシンボルやイメージを幼児に豊かに提供して、表現・表出活動を促し、幼児の内的な世界を充実させて、人格の発達を促していくと思われる。

##### 2) 幼児のうたの発達的な関わり

幼児と音楽との関わりのなかで「うた」を再考すると、児童のうたに比べて「生活に関するうた」「動物に関わるうた」「のりものに関わるうた」「身体に関するうた」の割合が高いことが明らかとなった。

「手遊びうた」や「身体に関するうた」は身ぶりを使った模倣遊びと通じる。また「糸まき」や「あがりめさがりめ」など、うたと動作が対となっているものもある。動作と動作、音と動作が対になっているうたは、「交替やりとり遊び」と同様に、役割の交替をとおして、人との関係を築いていく要素になりうる。幼児期は一人遊びからごっこ遊びに代表されるようななりきり遊びに移行する中で、自分なりの内界が対象化されはじめ、それぞれが独自の内界をもつことを理解すると岩田(2001)は述べる。交替やりとり遊びなどの音楽と遊びの一連の活動は、他者が自己になりまた自己が他者になるという可換的なやりとりを通して、幼児が他者を通じた自分という自己意識を獲得するのに、重要な役割を果たす。たとえば、保育者と幼児が「あがりめさがりめ」をともに楽しむとき、保育者があがりめと、自分の目を上げる行動を幼児は見、自分の目を上げる。このとき、鏡がないため自分の状態の確認は出来ないものの、保育者の様子を見て、自分の状態を推測するという視点の転換によって、この遊びは成立する

のである。発達に応じた音楽遊びを好む事は今回の結果から明らかとなっている。事実、児童のうたの中には「身体に関するうた」に分類されるうたはない。幼児にとって面白みのある歌であっても、児童にとっては刺激の少なさから面白みに欠けると考える。

「生活に関するうた」は歯磨きや挨拶など生活するうえでのルールを楽しくうたで反復して身につける。人との関わりの基礎や安定した生活リズムの獲得するために自発性を高めるためにも、音楽は重要な役割を果たす。「動物に関わるうた」「のりものに関わるうた」は自分の内的表象を表現することが多い曲である。「かえるのうた」で「ぐわ ぐわ ぐわ ぐわ」とかえるになりきって歌う時、「アイアイ」でサルになって、踊っている時、幼児はその動物になりきって表現を楽しむ。自分以外のものになりきって表現すること自体に遊びとしてのカタルシスとしての役割があり、また元型の表現や人間本来の本能的な動物としての根を失わなくてすむ役割を担っているのである。

以上のように幼児の体験している音楽は、幼児の発達段階をよくあらわしていると考察する。そして音楽を通した遊びは自分と他者との関わりを促がしたり、生活リズムの獲得や表現活動などに関わっており、幼児の成長を支えるものとして存在するのである。

### 3) リトミックの発達的な意義

リトミックでは即時反応の技法をよく用いられている。演奏者の合図に合わせて身体表現を変化させることは、音の変化を感じ取ったり、周りの状況を考慮した行動を取り入れるなど、幼児の集中力を高めること、また音の変化に対応することで音楽の情操を自身に取り込み表現の域が広がることも前に述べた。情動や表現という観点からもこの即時反応は鑑みることがで

きると考察する。

幼児は上手に表現することが目的ではなく、その対象のようになりきる事による表現が重要である。うたを歌い、遊ぶことでも十分にその役割は果たせるであろう。しかし身体を使いながらの表現で即時反応を用いることで、なりきった対象により近づくのである。例えばのりものになりきって、ピアノの合図に合わせてブレーキを踏むという活動を考えた場合に、幼児が合図を聞いて（受動的な活動）ブレーキを踏みとまる（能動的な活動）といった動作へ変換することができる。これはあたかも強くたくましく頼りになるのりもの（自分の身体）を自分が動かしている能動的な活動へと変換させることができる体験でもあり、強い自分・偉大な存在と自分自身のなかに感じたときの元型と重ね合わせることができる体験である。また受動的な活動から能動的な活動への変換により自らが体験することの重要性を安島（2000）は遊戯療法に関する著書のなかで「子どもが自分以外の「嘘っこ」のごっこ遊びに夢中になるのは人の心の世界は内なる幻想にとどまることなく表現されることを待っていると言っても過言ではない。自己から紡ぎ出され、表現された物語は言ってみれば外在化された自己の筋道だった骨格であり、自らが自分の物語の登場人物を演じてはじめて、物語の世界を場で生きることができる。」と述べているように、身体をもって生きているという自分が、演じるという行為によって物語の内容を体験として再獲得するのである。音楽のなかの表現は遊戯療法の表現とは異なるが、表現とは何かという示唆のなかで、自分が主人公になって体験することと位置づけるなら、音楽活動のなかの体験も主人公となる要素を即時反応を利用して、強めることができるのではないかと考える。即時反応を用いた活動は演奏にあわせるだけではなく、音楽体験や

表現を能動的に変える要素も含んでいると考察する。

このように模倣遊びや認知的な発達的な観点からもまた表現活動が幼児の成長を支えることから幼児が主体となって音楽にのせて表現をしたり身体を動かしたりするリトミックは幼児に有効な体験であり、幼児の発達を支えると結論付ける。

保育所や幼稚園といった集団生活を送る場で、幼児の日常とともに音楽は楽しまれている。うたを歌って楽しいことやリズム遊びが楽しいという楽しさに付け加え、表現することによる成長を視野にいたれた保育園や幼稚園での取り組みを音楽指導のあり方として期待したい。

## 5. おわりに

幼児のうたには乗り物や動物が多く出てきて、自分ではなく何かになりきることを楽しみながら、表現している。音に隠れたイメージや幼児が表現するイメージの意味や発達的な課題を踏まえた音楽体験を今後も研究していきたいと考えている。本研究ではその研究の枠組みの概略を示すにとどまったが、今後、「音楽」「発達」「イメージ」それぞれをさらに深め統合し、音楽表現とは何かという課題に取り組んでいきたい。

## 引用・参考文献

- ・安島智子. (2000). 遊戯療法の研究. 日本遊戯療法学会編, pp.3-16
- ・Bunt, L. (1996). 音楽療法 (稲田雅美, 訳). P.51. ミネルヴァ書房. (Bunt, L. (1994). *Music Therapy: An Art Beyond Words*. Routledge.).
- ・Davidson, L., McKernon, P., & Gardner, H. (1981). The acquisition of song: A developmental approach, in *Documentary report of the Ann Arbor symposium*, Reston. VA. MENC.

- ・長谷川久美子, 編著 (2010). 誰でもスグに弾ける保育のうた・こどものうた 120 shinko music
- ・今川恭子・志民一成. (2003). 子どもの声と音楽的表現 (2) 声および声域をめぐる議論の再検討. 日本保育学会大会研究論文集 (56), pp562-563.
- ・板野平・岩瀬蓉子・石丸由理・長尾満里. (1982). みんなでやろう リトミック. ひかりのくに株式会社.
- ・板野平・神原雅之・野上俊之. (1987). ダルクローズ教育法による リトミック コーナー チャイルド社.
- ・岩崎光弘. (1993). リトミックってなあに. ドレミ楽譜出版社.
- ・岩田純一. (2001). <わたし>の発達 乳幼児が語る<わたし>の世界 ミネルヴァ書房
- ・Jensen, F. & Mullen, S. (1988). 回想のユング ユングをめぐる二人の女性 (ユング心理学選書) (藤瀬恭子, 訳). P.26-27. 創元社. (Jensen, F. & Mullen, S. (1983). C. G. Jung, Emma Jung and Toni Wolff. *A Collection of Remembrances*. Analytical Psychology Club. Books LLC.).
- ・小林美実. (1975). こどものうた 200. 保育実用書シリーズ. チャイルド本社.
- ・厚生労働省 (2008). 保育所保育指針—平成 20 年告示 厚生労働省.
- ・教育芸術社 音楽研究グループ編集 (2003). 歌はともだち. 2 訂版 教育芸術社.
- ・MacDonald, D. & Simons, J. (1999). 音楽的成長と発達—誕生から 6 歳まで— (神原雅之・難波正明・里村生英・渡辺均・吉永早苗, 共訳). 溪水社. (MacDonald, D. & Simons, J. (1989). *Musical Growth and Development: Birth Through Six*. Schermer, Books).
- ・松井尚子. (2006). スターンとワロンにみる乳幼児の他者体験と「自己」の形成: 日常的なエピソードを通して. 北海道大学大学院教育学研究科紀要, pp.237-250.
- ・みんなでうたおう編集委員会. (2003). 新版みんなで歌おう 日本標準.
- ・文部科学省. (2008). 幼稚園教育要領—平成 20 年 3 月告示 [大型版] 文部科学省.
- ・無藤隆・岡本祐子・大坪治彦編 (2004). よくわかる発達心理学. ミネルバ書房.
- ・宮西達也. (2003). おまえうまそうだな (絵本の時間). ポプラ社.



- ・宮西達也/ポプラ社. おまえうまそうだな制作委員会. (2010/10/04 ~ 10/08.AM6:40~45). 瀧澤 正 治 監督・音楽: まついえつこ. ナレーション: 堀玲子. 宮西達也劇場 おまえうまそうだな.
- ・Priestley, M. (2003). 分析的音楽療法とは何か (若尾裕・古平孝子・多治見 陽子・沼田里衣, 訳). p.64. 音楽之友社. (Priestley, M. (1994). *Essays on analytical music therapy*. Barce lona Publishers.).
- ・桜井茂男・杉原一昭. (1985). 幼児の有能感と社会的受容感の測定. 教育心理学研究, 33, pp.237-242.
- ・柴田利男. (2005). 幼児の自己効力感と対人行動. 北星学園大学社会福祉学部北星論集, 42, pp.11-24.
- ・常石秀市. (2008). 感覚器の成長・発達. バイオメカニズム学会誌, 32 (2) ,pp. 69-73.
- ・上西知子. (2007). 制作過程とはどのような経験か : 美術教育の可能性. 美術教育学 : 美術科教育学会誌 (28), pp.39-50.
- ・Vanderspar, E. (1996). リトミック教育のための原理と指針 ダルクローズのリトミック (石丸由理, 訳). ドレミ楽譜出版社. (Vanderspar, E. (1984). *DALCROZE HANDBOOK*. The Dalcroze Society Inc) .
- ・Wallon, H. (1983). (浜岡寿美男, 訳). 情意的関係——情動について 身体・自我・社会. ミネルヴァ書 房. (Wallon, H. (1954). *Rapports affectifs: les emotions, La vie mentale*, Vol, VIII de (L'encyclepedue Frabcaise).
- ・Zazzo, R. (1975). *Psychologie et marxisme: la vie et l'oeuvre de Henri Wallon*. Denoël/Gonthier

*Abstract*

## The Study on the Music Development and Rythmique for Infants: Through the Music Analysis and Case Study

Kan'ichi IMAI, Yuri YOSHIMURA, Utako HORIUCHI

The purpose of this study is to reveal how infant's music experience affects his/her development and personality growth.

This study addresses the "cognition" or "feeling organ" issues on music development, and also discusses mainly the emotion and posture, in order to identify the music experience from the aspect of representation and self-awareness. Moreover, from based on Jung's theory, we describe the developed meaning that infants express their own images.

The effectiveness of eurhythmics education has been introduced as one of the infant song's features and music experience based on the above theory. Eurhythmics may have the function of converting passive expression into active expression, in addition to promoting infant development by using immediate reaction.

Finally, we conclude that the music experience for infants supported their development and personality growth, and eurhythmics was effective as the expression means.

Key words : images, development, music experience, eurhythmics